

世紀末ウィーンにおける音楽と政治

高野 茂

(佐賀大学)

19世紀末のウィーンの音楽界は、ブラームスを中心とする保守派とヴァーグネリアンたちによる進歩的なブルックナー派に二分されていた。その美学的な対立には、当時のオーストリアの政治状況がからんでいた。すなわち、保守派の代表とされるブラームスは政治的には自由主義者であり、むしろ改革派であるのに対して、「未来の音楽」を標榜するブルックナー派は、自由主義政策の推し進める改革に不満をもつ保守主義、急進的ドイツ民族主義、反ユダヤ主義と結びついていた。個人的には社会や政治に無関心であると考えられているブルックナーは、実はそうした政治党派を象徴する存在に祭り上げられていたのである。また、ふつうヴァーグナー派とされているマーラーには、親ユダヤ的である自由主義者ブラームスとの共通性をみとめることができる。

Music and Politics in the Viennese fin-de-siècle

Takano, Shigeru
(Saga University)

音楽芸術はその時代の政治（思想、運動、政治の結果としての社会など）といかに関わっているだろうか？ 創作活動の結果としての音楽作品そのものをみようとするかぎり、そこから時代背景、まして政治的な要素を読み取ることはまず期待できない。音楽作品は、過去の音楽的遺産や作曲技法の進歩、音楽様式の変遷といったコンテクスト、特定の音楽家からの影響などの視点からみられるのが普通であり、そのことは19世紀末のウィーンの音楽事情にもあてはまる。

一般的な理解によれば、当時のウィーンは（音楽思想的、音楽様式的、作曲技法的にみて）保守派と進歩派に分かれて対立していた。一方にはバッハ、ベートーヴェン、シューマンといったドイツ音楽の伝統を受け継ぐブラームスの音楽を範としハンスリックらの音楽批評に支えられたアカデミズムがあり、他方にはヴァーグナーやリストの「未来の音楽」に共感をよせる進歩的立場がある。ブラームスに対抗する後者の同国人の立役者はブルックナーであり、その有力な組織は1873年設立のウィーン・ヴァーグナー協会 **Wiener Akademischer Wagner-Verein** である。一時期、音楽評論によって進歩派の論陣を張ったヴォルフは言うにおよばず、マーラーも後者の

陣営に属するとされる。

音楽家といえども、彼らの生きた時代の特定の社会状況のなかで生き、その時代の政治を身をもって体験した生身の人間である。彼らの音楽活動は、当時の社会の状況、とりわけ聴衆の趣味や生活様式、芸術観、倫理観などや、それらを反映した音楽評論と対峙しておこなわれる。上述の世紀末ウィーンの音楽状況に当時の政治的、社会的状況を重ね合わせてみた場合、その図式に大幅な変更を余儀なくされることはないとしても、異なった視点を加えたより多面的な解釈が可能になるのではないだろうか。

Botstein や Notley のすぐれた研究によって、ブラームスが当時のウィーンの自由主義的な階層から強い支持を受けており、彼自身も自由主義的信念の持ち主であったことが明らかにされている。19世紀後半のオーストリアは、プロイセンとの覇権争いに敗れて危機感をつのらせ、産業の育成と民主的な社会改革を急いだ。こうした情勢において力を得たのが自由主義政党であり、自由主義的憲法の発布された1867年の下院選挙以来、優勢政党として多くの進歩的政策（科学技術の推進、産業育成、社会制度の合理的改革、カトリックの影響力の排除、労働者の保護など）をおこなってきた。自由主義政党の支持者は、進取の精神に富む企業家や知識人をふくんだ上流、中流の上層部をなすドイツ人たちや多くの同化ユダヤ人たちである。彼らは新生都市ウィーンの第一区に住み、劇場、オペラ劇場、音楽ホールの予約席を占有する芸術愛好家でもあった。彼らは伝統を重んじながらもそれを果敢に改革していく知性の持ち主である。また彼らの多くは、ユダヤ人もふくめて、ドイツ文化を重んじ最終的にはドイツ人による統一国家形成をめざすドイツ民族主義者でもあった。彼らは伝統的ドイツ音楽やブラームスの熱烈な支持者であったが、ブラームス自身もこうした自由主義者たちの性格や信念を共有していたという。つまりブラームスは政治的にみると保守派ではなく、その逆なのである。

オーストリアにおける産業革命の進行にともなう帝国の周辺部から都市部への人口の流入などによって、政治的版図は変化し、1879年の総選挙で自由主義派が後退、保守派の連携によるターフェ内閣が成立する。時の経過とともに帝国領内の諸民族の要求は高まり、ドイツ民族主義は急進化して反ユダヤ主義的傾向を強め、社会主義運動もますます盛り上がりを見せるようになる。こうした新しい大衆的政治運動と結びついたのが、ヴァーグナーの芸術に共感する「進歩派」の陣営である。とくにヴァーグナー自身の主張するドイツ主義と反ユダヤ主義は、自由主義政策によって勢力の縮小を余儀なくされたカトリック聖職者層や貴族、中小の企業経営者、保守的農民などの不満にアピールする力をもっていた。ヴァーグナーの死去にともなうウィーンでの追悼行事（1883年3月）は、ドイツ民族主義の党派色の濃いものであり、ほとんど政治的イベントと言ってよかったほどである。

Botstein が言うように、ブラームスを保守的、ヴァーグナーとその支持者たちを進歩的とする美学的な区分法は、それを社会という鏡に映してみた場合に、逆転してしまうと考えられるのである。

ブラームス派とヴァーグナー派（あるいはブルックナー派）の党派的ともいえる対立は、後者の熱烈な支持者であるヴォルフの多くの音楽評論のなかに例示されている。たとえば彼は、崇拜するリストの作品がウィーンでいかに理解されないかに不平を述べ、リストの作品にブーイング

を送るのは、ほかならぬ一階席に陣取っているユダヤ人たちだ、と弾劾する。また彼は、ブラームスとブルックナーの交響曲を比較して、「ブルックナーの交響曲は、どちらかといえば美的価値の低いような作品であっても、それはチンボラソ山のごとくであり、それに比べればブラームスの交響曲などもぐらの盛り土に等しい」とまで言い切っている。

ブルックナーはウィーンにおいて、その田舎びた服装やマナーゆえに、自由主義的改革以前の古き良き時代のオーストリアを象徴する人間として尊ばれていたという。つまりブルックナーは、野心にあふれたユダヤ人企業家などが推し進める資本主義化とそれに伴う社会的変化に危機感をもつドイツ人にとって、なぐさめとなるノスタルジックな存在であった。こうした復古趣味とヴァーグナー的革新が奇妙に結びついた音楽家として、ブルックナーはブラームス派に対抗する旗手に祭り上げられていったのである。本人の政治的信条はどうあれ、少なくとも外部的にはブルックナーはきわめて政治的な存在だったわけである。

ブルックナーは23年間にわたってウィーン・ヴァーグナー協会の会員（のちに名誉会員）であった。この協会は一貫してブルックナーやヴォルフを支持した。ヴァーグナー協会の主催する行事は、ドイツ民族主義的な新聞である *Deutsche Zeitung* で報道されるのが常であった。とはいえヴァーグナー協会が急進的なドイツ民族主義から一定の距離を置いていたことは、この協会に多くのユダヤ人の会員がいた事実が示している。それを嫌ったヴァーグネリアンたちは、1889年にユダヤ人を排除した別のヴァーグナー協会をつくる。ここでもブルックナーは（たとえ形式的であれ）その主要なメンバーに名を連ねている。

マーラーはふつうヴァーグナー派であったとされている。若い頃からの彼のヴァーグナーに対する崇敬の念が一生涯にわたって変わらなかったのは事実である。彼はヴァーグナーの音楽に魅了されたばかりではなく、その芸術観や宗教も彼に多大な影響をあたえている。若いマーラーが肉食主義を実行していたのはその一例であろう。また彼は小さい頃からドイツ文化を志向しており、彼の芸術もドイツ文化（それもすこし古いドイツ・ロマン主義）に根ざしていた。しかしユダヤ人の出自をもつマーラーの立場は、ドイツ民族主義が急進化して反ユダヤ主義を標榜するようになり、ヴァーグナーがその象徴的存在になったとき、けっして単純ではなかったはずである。そうした政治的社会的状況を考えた場合、ユダヤ人のマーラーを単純にヴァーグナー派に分類することには疑問なしとしない。そこには他のユダヤ人のヴァーグネリアンたちの置かれていたと同じジレンマがあったはずであるが、しかしそのこと以上に、マーラーはむしろ、ふつう考えられている以上にブラームス寄りの音楽家であったとも考えられるのである。

マーラーは1890年代、夏の休暇にはきまってパート・イシュルで静養中のブラームスを訪ねた。ブラームスがかつてブダペストでのマーラーによるモーツァルトのオペラ上演を高く評価したのが、そのきっかけであった。マーラーが反ユダヤ主義の政治家の代表格であるルエーガーがウィーン市長となった同じ1897年に、ウィーン宮廷歌劇場監督のポストに就くことができたのも、ブラームスやハンスリックといった保守派といわれる人たちの支持があったからだと考えられている。これらは立身出世をめざすマーラーが力ある人たちに取り入ったのだとみる向きもあるが、必ずしもそうとばかりは言えない。

こうした時代、反ユダヤ主義とたたかいユダヤ人を擁護したのは、従来の自由主義者たちであ

った。その点でブラームスも例外ではない。彼はユダヤ人に対する差別的意識がなく、多くのユダヤ人の友人や知人をもっており、そのユダヤ人との近さが批判をまねくこともあったという。そのブラームスが（演奏家としての）マーラーを正当に評価して、マーラーを支持したとしても不思議ではない。一方マーラーは、ヴォルフとは違い、ブルックナーよりもブラームスの音楽をより高く評価していたことが知られている。彼が重視したのは、楽想のインスピレーションそのものよりも、その素材をいかに有機的に展開し、素材と形式の一体化したかたちをつくれるかであった。それとは対照的に、ヴォルフは音楽的靈感の真偽を厳しく判定し、ブルックナーに「知性の欠如」を認めながらもその巨人的息吹を賛美した。ヴォルフとマーラーの評価は、リストについてもはっきりと分かれる。マーラーがリストを評価しない理由は、その「貧弱な内容と見せかけだけのつぎはぎ細工」にあるという。こうした音楽の論理的展開へのこだわり、伝統を継承しながらそこに改革の手を加えていくという自由主義の特性を認めることはできないだろうか。